〈資料紹介〉倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」「萱の葉」他（二）解説

加藤　美奈子

はじめに

本論叢第四二号掲載の拙稿「倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」「萱の葉」他（一）解題・図版・翻刻」において、「薄田泣菫文庫」所収の与謝野晶子自筆歌稿を紹介した。前稿では、「紫影抄」「萱の葉」と題された詠草を含む、原稿用紙九枚の図版・翻刻を示し、解題を加えた。本稿では、短歌作品の初出、歌集・全集等への所収状況、表現・表記等の異同を詳らかにしたい。なお、**【図版1】**～**【図版9】**は前稿掲載の図版・翻刻に準じている。

一　凡例

前稿で示した歌稿順に初出、所収状況、異同を示す。底本は、『定本與謝野晶子全集』一～二〇巻（講談社、昭和五四～五六年）によった（以下、『全集』）。表現・表記の異同を示す傍線は、引用者による（ルビの有無、字体の異同には傍線は用いず、テキストで示した）。

ゴシック体で自筆歌稿の翻刻を示した（文字の修正箇所の記号等は省略した）。〔拾遺〕は、『全集』により（　）内に初出年を示している。歌番号は、〔歌集〕〔拾遺〕ともに、『全集』によった。〔新全〕は、新潮社版『晶子短歌全集』（大正八～九年）、〔改全〕は、改造社版『與謝野晶子全集』（昭和八～九年）、異同は『全集』

によった。

・―初出掲載、歌集未所収歌。〔初出〕に初出紙・誌名を示す。

○―歌集所収歌。〔歌集〕に所収歌集・歌番号を示す。

●―初出不明・歌集未所収歌。

【①】～【⑭】―〔初出〕の図版番号（後掲）。

「大阪毎日」―「大阪毎日新聞」

二　与謝野晶子自筆歌稿「紫影抄」「萱の葉」他　初出・所収歌集、異同

【図版1】【図版2】題「紫影抄」、「与謝野晶子」署名、一五首。

・一歩づつ進まず春は翅もて未來へ渡るここちこそすれ

〔初出〕一歩づつ進まず春は翅もて未來へ渡るここちこそすれ

（「大阪毎日」（大正一〇年一月一六日）「紫影抄」【①】）

〔拾遺（大正十年）〕56

○春の雪勸進帳の強力のごとあてやかに歩みくるかな

〔初出〕春の雪勸進帳の強力のごとあでやかに歩みくるかな

（「大阪毎日」（大正一〇年一月一六日）「紫影抄」【①】）

〔参考〕「演藝畫報」（大正一〇年一一月）「觀戯雑詠」

〔歌集〕春の雪勸進帳の強力のごとあてやかに歩むものかな

（『草の夢』（日本評論社、大正一一年九月）227）

〔改全〕春の雪勸進帳の強力のごとあてやかにあゆむものかな

・わたつみが高く上げたる白玉のかひなと見ゆる夕ぐれの月

〔初出〕わたつみが高く上げたる白玉のかひなと見ゆる夕ぐれの月（「大阪毎日」（大正一〇年一月一六日）「紫影抄」【①】）

〔拾遺（大正十年）〕57

○春寒し蒲の穂よりも穢なげになりつる（春）〔雪〕を四日五日見る

〔初出〕春寒し蒲の穂よりも穢なげになりつゝ雪を四日五日見る

（「大阪毎日」（大正一〇年一月七日）「紫影抄」【②】）

〔歌集〕春寒し蒲の穂よりも穢なげになりつる雪を四日五日見る

（『草の夢』（前掲）247）

〔改全〕春寒し蘆の穂よりも穢なげになりつる雪を四日五日見る

・びろうどの春の光のほのさして薔薇の匂へる身のほとりかな

〔初出〕びろうどの春の光のほのさして薔薇の匂へる身のほとりかな（「大阪毎日」（大正一〇年一月七日）「紫影抄」【②】）

〔拾遺（大正十年）〕51

・失ひしものことごとく歸りこし歡喜を薔薇の花に（覚）〔覺〕ゆる

〔初出〕失ひしものことごとく歸りこし歡喜を薔薇の花に覺ゆる
（「大阪毎日」（大正一〇年一月七日）「紫影抄」【②】）
〔拾遺（大正十年）〕52

・ふるさとの砂山なども思はれてうらなつかしき雪のむら消
〔初出〕ふるさとの砂山なども思はれてうらなつかしき雪のむら消（「大阪毎日」（大正一〇年一月一八日）「紫影抄」【③】）
〔拾遺（大正十年）〕60

・美くしき雪に根ざしてあるさます柳ゆづりは白玉椿
〔初出〕美しき雪に根ざしてあるさます柳ゆづりは白玉椿
（「大阪毎日」（大正一〇年一月一八日）「紫影抄」【③】）
〔拾遺（大正十年）〕59

・わが心絶えずも雨の降るごとし恋の煙のしめやかに立つ
〔初出〕わが心絶ゑずも雨の降るごとし戀の煙のしめやかに立つ
（「大阪毎日」（大正一〇年一月一八日）「紫影抄」【③】）
〔拾遺（大正十年）〕58

・一人居て叩けば夜半の木枯の音に似通ふわがピヤノかな
〔初出〕一人居て叩けば夜半の木枯の音に似通ふわがピヤノかな
（「大阪毎日」（大正一〇年一月二日「日曜附録」）「紫影抄」【④】）＊『全集』未所収

・紅縞の切を被りて愚かなる田舎娘の春の歩み來
〔初出〕紅縞の切を被りて愚なる田舎娘の春の歩み來
（「大阪毎日」（大正一〇年一月二日「日曜附録」）「紫影抄」【④】）＊『全集』未所収

・半いと誇りかにしてその半羞かしげなる（あけ）あかつきの空
〔初出〕半いと誇りかにしてその半羞かしげなるあかつきの空
（「大阪毎日」（大正一〇年一月二日「日曜附録」）「紫影抄」【④】）＊『全集』未所収

・薔薇を見ていみじきものが地にひそむ不可思議に泣くはたわれを泣く
〔初出〕薔薇を見ていみじきものが地にひそむ不可思議に泣くはたわれに泣く
（「大阪毎日」（大正一〇年一月一二日）「紫影抄」【⑤】）
〔拾遺（大正十年）〕53

・霧の降り山彦の聲おもしろき溪の思はる旅にいでまし
〔初出〕霧の降り山彦の聲おもしろき溪の思はる旅にいでまし
（「大阪毎日」（大正一〇年一月一二日）「紫影抄」【⑤】）

〔拾遺（大正十年）〕54

・彼方の灯ものを説くごとにじみきぬ春の雨夜の長き道かな

〔初出〕彼方の灯ものを説くごとにじみきぬ春の雨夜の長き道かな

（「大阪毎日」（大正一〇年一月一二日）「紫影抄」【⑤】）

〔拾遺（大正十年）〕55

【図版3】【図版4】題の位置に「○」、「与謝野晶子」署名、一八首。

＊『全集』未所収、●初出不明・歌集未所収歌―七首

○地と空の中にいみじく揺るる馬車われそれに居ぬ侮はしく

〔初出〕地と空の中にいみじく揺るる馬車われ其れに居ぬ侮はしく（「明星」（大正一〇年一一月）「草枕」、詞書「北信旅中の作」【⑮】）

〔歌集〕地と空の中にいみじく揺るる馬車われそれに居ぬあなづらはしく（『草の夢』（前掲）33）

・いかづちに半身捨てし木の株をこれぞと覗く畫の雲かな

〔初出〕いかづちに半身捨てし木の株はこれぞと覗く畫の雲かな

（「明星」（大正一〇年一一月）「草枕」、詞書「北信旅中の作」【⑮】）

〔拾遺（大正十年）〕287

●うばたまの髪煩はし身の中の焦れ心はなほ煩はし

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

○山の背に雲湧き出でぬ物思ひ募りて熱の發する如く

〔初出〕山の背に雲湧き出でぬもの思ひ募りて熱の發する如く

（「明星」（大正一〇年一一月）「草枕」、詞書「北信旅中の作」【⑮】）

〔歌集〕山の背に雲わき出でぬ物思ひつのりて熱の發する如く

（『草の夢』（前掲）216）

〔改全〕山の背に雲わき出でぬ物思ひつのりて熱の發するごとく

○姑と世に云ふものが片隅にある心地するくらき浴場

〔歌集〕姑と世に云ふものが片隅にある心地するくらき浴室

（『草の夢』（前掲）30）

〔改全〕姑と世に云ふものが片すみにあるここちするくらき浴室

●わが行くは月しろの下路長く浅間おろしに黍の葉の鳴る

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

○女郎花山の桔梗をたをやめの腰ほど抱き浅間を下る

〔歌集〕女郎花山の桔梗をたをやめの腰ほど抱き浅間を下る

（『草の夢』（前掲）26）

〔改全〕女郎花山の桔梗をたをやめの腰ほどいだき淺間をくだる

●心をばお伽ばなしの悪黨も思ひよらざる洞に投げうつ

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

●はかなさの限り知らぬも激しきに過ぎたる人の恋のならはし

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

○もの云へど應ずる山もあらぬなり北の信濃に夜を五つ寝る

〔初出〕物云へど應ずる山もあらぬなり北の信濃に夜を五つ寝る

（「明星」（大正一〇年一一月）「草枕」、詞書「北信旅中の作」【⑮】）

〔歌集〕物云へど應ずる山もあらぬなり北の信濃に夜を五つ寝る

（『草の夢』（前掲）27）

○裾野なる花ははかなし一草をあまさず山の風に順ふ

〔歌集〕裾野なる花ははかなし一草をあまさず山の風に從ふ（『草の夢』（前掲）25）

〔改全〕裾野なる花ははかなし一草をあまさず山のかぜに從ふ

●君がこと淺間の嶽のふもとなる落葉松の木が知るよしもなし

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

○明星の光郭公はたおのれ殊更めくとたのしむわれは

〔初出〕明星のひかり郭公はたおのれ殊更めくと樂むわれは

（「明星」（大正一〇年一一月）「草枕」【⑮】）

〔歌集〕明星の光郭公はたおのれことさらめくと樂むわれは

（『草の夢』（前掲）510）

〔全集〕「※郭公→郭公」

〔改全〕明星の光郭公はたおのれことさらめくとたのしむわれは

○われさびし見る日來らずいつしかと文が運びし香料も盡く

〔初出〕われ淋し見る日來らずいつしかと文が運びし香料も盡く

（「明星」（大正一〇年一一月）「草枕」【⑮】）

〔歌集〕われ淋し見る日來らずいつしかと文が運びし香科も盡く

（『草の夢』（前掲）495）

〔全集〕「※香科→香料」

〔改全〕われ寂し見る日來らずいつしかと文が運びし香科も盡く

○雲湧けば忽ち雨すゆとりなきわかき心の初秋の空

〔歌集〕雲湧けば直ちに雨すゆとりなき若き心の初秋の空

（『草の夢』（前掲）31）

〔改全〕雲湧けばただちに雨すゆとりなき若きこころの初秋の空

○夏草を盗人のごと憎めどもその主人より丈高くなる

〔歌集〕夏草を盗人のごと憎めどもその主人より丈高くなる

（『草の夢』（前掲）24）

〔改全〕夏草を盗びとのごと憎めどもその主人より丈高くなる

●山の端に残月のごと黄昏の光ただよひ雨ふりいでぬ

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

●夕月の光の中に浅間山ゆるぎ出でくる心地こそすれ

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

【図版5】無題、無署名、六首。

＊『全集』未所収、●初出不明・歌集未所収歌―一首

・胡地にして木無き黄土を踏む旅の今うちつけに思はるるかな

〔初出〕胡地にして木無き黄土を踏む旅の今うちつけに思はるゝ―かな（「大阪毎日」（大正一〇年七月二四日「日曜附録」）

【⑥】＊『全集』未所収

・わが手して開くべき戸の多かるに倦みて花咲く園に眠れり

〔初出〕わが手して開くべき戸の多かるに倦みて花咲く園に眠れり（「大阪毎日」（大正一〇年七月二四日「日曜附録」）【⑥】）

＊『全集』未所収

●磨くべきものと知りしに人來りさかしら（すれ）〔云へ〕ばまた顧みず

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

・わが岩の三尺低きところにて思ひ歎けるわたつみの波

〔初出〕わが岩の三尺低きところにて思ひ歎けるわたつみの波

（「大阪毎日」（大正一〇年五月二九日）【⑦】）

〔拾遺（大正十年）〕168

・手を組みて空を眺むる白き薔薇痩せたる薔薇もあはれなりけれ

〔初出〕手を組みて空を眺むる白き薔薇痩せたる薔薇もあはれなりけり（「大阪毎日」（大正一〇年五月二九日）【⑦】）

〔拾遺（大正十年）〕169

・何により支へられたるものとなく俄に心くづされて泣く

〔初出〕何により支へられたるものもなく俄に心くづされて泣く

（「大阪毎日」（大正一〇年五月二九日）【⑦】）

〔拾遺（大正十年）〕170

【図版6】題「萱の葉」、「与謝野晶子」署名、一〇首。
＊『全集』未所収、●初出不明・歌集未所収歌―一首

○あぢきなし心に尖のあることを君もおのれも知りぬこのごろ
〔初出〕あぢきなし心に尖のある事を君もおのれも知らぬこの頃
（「大阪毎日」（大正五年七月一〇日）「萱の葉」【⑧】）
〔歌集〕あぢきなし心に尖のあることを君もおのれも知りぬこの頃（『晶子新集』（阿蘭陀書房、大正六年二月）32）

○夏の月薄らにあるが砂濱の貝の葉めきてなつかしきかな
〔初出〕夏の月薄らにあるが砂濱の貝の葉めきてなつかしきかな
（「大阪毎日」（大正五年七月一〇日）「萱の葉」【⑧】）
〔歌集〕夏の月薄らにかかり砂濱の貝の葉めきてなつかしきかな
（『晶子新集』（前掲）21）

○自らを海に沈める果てかとも思ふ五月の長雨のころ
〔初出〕自らを海に沈める果てかとも思ふ五月の長雨のころ
（「大阪毎日」（大正五年七月一〇日）「萱の葉」【⑧】）
〔歌集〕自らを海に沈めるはてかとも思ふ皐月の長雨のころ
（『晶子新集』（前掲）24）
〔新全〕みづからを海に沈めるはてかとも思ふ皐月の長雨のころ

○赤とんぼ蝋燭蜻蛉上を飛び紫陽花の花清らに光る
〔初出〕赤とんぼ蝋燭蜻蛉うへを飛び紫陽花の花清らに光る
（「大阪毎日」（大正五年七月三一日）「短歌」【⑨】）
〔歌集〕赤とんぼ蝋燭とんぼ飛びかひてあぢさゐの花清らに光る
（『晶子新集』（前掲）25）
〔新全〕〔改全〕初版同

○黒髪の端も見ざりし旅などと法師の如き嘘云ふものか
〔初出〕黒髪の端も見ざりし旅などと法師の如き嘘いふものか
（「大阪毎日」（大正五年七月三一日）「短歌」【⑨】）
〔歌集〕くろ髪の端も見ざりし旅などと法師の如く云ひなすものか（『晶子新集』（前掲）36）
〔新全〕くろ髪の端も見ざりし旅などと法師の如く云ひなせる人

○大井川あらし山など舞子など夜の皷など（若き）憎き人書く
〔初出〕大井川あらし山など舞妓など夜の皷など憎き人かく
（「大阪毎日」（大正五年七月三一日）「短歌」【⑨】）
〔参考〕「婦人畫報」（大正五年八月）「夏のおもひ」
〔歌集〕大井川あらし山など舞子など夜の皷などにくき人書く
（『晶子新集』（前掲）39）
〔新全〕初版同

○夏山の御堂の疊踏みに來よ忘れに來よや佛のまへに

〔初出〕夏山の御堂の疊踏みにこよ忘れに來よや佛の前に

（「婦人畫報」（大正五年八月）「夏のおもひ」）

〔歌集〕夏山の御堂の疊踏みに來よ忘れに來よや佛のまへに

（『晶子新集』（前掲）291）

〔新全〕夏山の御堂のたたみ踏みに來よ忘れに來よや佛のまへに

○湖やわがあかつきの蚊帳のごと輕げにうごくふなばたの波

〔歌集〕湖やわが曉の蚊帳のごとかろげに動くふなばたの波

（『晶子新集』（前掲）296）

〔改全〕みづうみやわが曉の蚊帳のごとかろげに動くふなばたの波

○初夏の青玉の日をかたはらになしつつ君を打恨むらく

〔歌集〕初夏の青玉の日をかたはらになせば翅もあるここちする（『晶子新集』（前掲）303）

〔全集〕「※青玉→青玉」

〔新全〕〔改全〕初版同

●物思ふ萱の葉などと並ぶ時今（日）こし方のわれもうらめし

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

【図版7】題の位置に「○」、「与謝野晶子」署名、九首。

＊『全集』未所収、●初出不明・歌集未所収歌―一首

○二階より緑の鳥の覗くをば夕月めくと君に云ふかな

〔歌集〕二階より緑の鳥の覗くをば夕月めくと君に云ふかな

（『草の夢』（前掲）354）

〔改全〕二階より緑の鳥ののぞくをば夕月めくと君に云ふかな

●洛陽も奈良の都も霞むなどおよづれ言す西を眺めて

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未所収

○海に入る白き棧橋末とげず忘れし恋に似たる棧橋

〔歌集〕あはれなる白き棧橋末とげず忘れし戀に似たる棧橋

（『草の夢』（前掲）353　詞書「以下上總にて」）

〔改全〕あはれなるしろき棧橋末とげず忘れし戀に似たる棧橋

・心より昇る煙もしかめやと思ひ上れるわが煙草かな

〔初出〕心より昇る煙もしかめやと思ひ上れるわが煙草かな

（「大阪毎日」（大正十年七月二日）【⑩】）

〔拾遺（大正十年）〕187

・天変か何かしらねど愛欲の颱風おこり身の危けれ

〔初出〕天變か何かしらねど愛慾の颱風おこり身の危けれ
（「大阪毎日」（大正十年七月二日）【⑩】）
〔拾遺（大正十年）〕188

・花多き少女椿は南國の鳥よりあてに身をもてなしぬ
〔初出〕花多き少女椿は南國の鳥よりあてに身をもてなしぬ
（「大阪毎日」（大正十年七月二日）【⑩】）
〔拾遺（大正十年）〕189

・あて人は漫りに心うごかさず唯涙のみ流るると見よ
〔初出〕あて人は漫りに心うごかさず唯涙のみ流るゝ｜と見よ
（「大阪毎日」（大正十年七月五日）【⑪】）
〔拾遺（大正十年）〕190

・心をば眞白き龍の如く見て自らおそれ近づかぬ時
〔初出〕心をば眞白き龍の如く見て自らおそれ近づかぬ時
（「大阪毎日」（大正十年七月五日）【⑪】）
〔拾遺（大正十年）〕191

・陳べて行く心とも見ず戯れに書くともなさぬ文通はせぬ
〔初出〕陳べて行く心とも見ず戯れに書くともなさぬ文通はせぬ
（「大阪毎日」（大正十年七月五日）【⑪】）
〔拾遺（大正十年）〕192

【図版8】題の位置に「○」、「与謝野晶子」署名、十首。

○夏の夜の鈍色の雲おし上げて孔雀あらはる白きひかりに
〔初出〕夏の夜の鈍色の雲おし上げて孔雀あらはる白きひかりに
（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）
〔歌集〕夏の夜の鈍色の雲おし上げて白き孔雀の月のぼりきぬ
（『火の鳥』（金尾文淵堂、大正八年八月）38）
〔改全〕夏の夜の鈍色の雲おし上げてしろき孔雀の月のぼりきぬ

・若き日の夢より出でし君なればおのれと思ふうきもつらきも
〔初出〕若き日の夢より出でし君なればおのれと思ふうきもつらきも（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）
〔拾遺（大正六年）〕73

○君と居てわがありさまを花と云ひ鳥と云はせて楽みし時
〔初出〕君と居てわがありさまを花と云ひ鳥と｜いはせて樂みし時
（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）
〔歌集〕君と居て我がありさまを花と云ひ鳥と云はせて樂｜みし時（『火の鳥』（前掲）39）
〔改全〕初版同

・いくそたびいみじく忍びわが胸へ歸り來りしこの忍術師

〔初出〕いくそたびいみじく忍びわが胸へ歸り來りしこの忍術師（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）

〔拾遺（大正六年）〕74

○七八つの薔薇傾きて竹濡るる恋の雨降る皐月ついたち

〔初出〕七八つの薔薇傾きて竹濡るる戀の雨降る皐月ついたち（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）

〔歌集〕七つ八つ薔薇かたぶきて傍の竹も濡れたる朝の雨かな（『火の鳥』（前掲）40）

〔改全〕七つ八つ薔薇かたぶきてかたはらの竹も濡れたる朝の雨かな

・疑はば知ると云へかしこのことを一つかなはぬ望みとて持つ

〔初出〕疑はば知ると云へかしこのことを一つかなはぬ望みとて持つ（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）

〔拾遺（大正六年）〕75

○足らぬこと少し覚ゆる時に逢ふ夢などを見て歎きぬるかな

〔初出〕足らぬこと少し覺ゆる時に逢ふ夢などを見て歎きぬるかな（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）

〔歌集〕足らぬこと少し覺ゆる頃にわれ夢などを見て歎きけるかな（『火の鳥』（前掲）46）

〔改全〕初版同

・いつしかと入りにけらしな二筋にひとつひとつの分れたる道

〔初出〕いつしかと入りにけらしな二筋にひとつひとつの分れたる道（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）

〔拾遺（大正六年）〕76

・芍薬の芽ごとに白き蝶の居て羽振れば雲の散りこしごとき

〔初出〕芍薬の芽ごとに白き蝶の居て羽振れば雲の散りこしごとき（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）

〔拾遺（大正六年）〕77

・自らに代りて君が云ひ給ふ妬みとばかりなつかしきかな

〔初出〕自らに代りて君が云ひ給ふ妬みとばかりなつかしきかな（「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」【⑫】）

〔拾遺（大正六年）〕78

【図版9】無題、無署名、六首（最初の一首は五句のみ）。

・る火の地獄より

〔初出〕君を見ずここにいたると死ぬ際に云ふを恐るる火の地獄より（「大阪毎日」（大正七年八月二五日）【⑬】）

〔拾遺（大正七年）〕205

＊五句のみ。前半の原稿があったことが推測される。

・この頃の初秋のかぜ朝夕心にものの足らぬ身を吹く

〔初出〕この頃の初秋のかぜ朝夕心にものの足らぬ身を吹く（「大阪毎日」（大正七年八月二五日）【⑬】）

〔拾遺（大正七年）〕206

・かたはらへ白きものをば積みに來る秋風としも思ひけるかな

〔初出〕かたはらへ白きものをば積みに來る秋風としも思ひけるかな（「大阪毎日」（大正七年八月二五日）【⑬】）

〔拾遺（大正七年）〕207

・五間ほど後に野馬の息ありてせせらぎのごと晝の虫啼く

〔初出〕五間ほど後に野馬の息ありてせゝらぎのごと晝の蟲啼く（「大阪毎日」（大正七年八月三一日）【⑭】）

〔拾遺（大正七年）〕208

・秋風のつめたき沓に踏れたる雜草を見てものを思ひぬ

〔初出〕秋風のつめたき沓に踏れたる雜草を見てものを思ひぬ（「大阪毎日」（大正七年八月三一日）【⑭】）

〔拾遺（大正七年）〕209

・川霧の上に七八つ薄く濃く藍色の山ならぶ朝かな

〔初出〕川霧の上に七八つ薄く濃く藍色の山ならぶ朝かな（「大阪毎日」（大正七年八月三一日）【⑭】）

〔拾遺（大正七年）〕210

三〔初出〕「大阪毎日新聞」【①】～【⑭】図版・解説

解説で引用した〔初出〕について、「大阪毎日新聞」における掲載紙面を以下に図版として示す。晶子の歌稿は、大阪毎日新聞社に勤めた薄田泣菫に残されたもので、その編集紙面への掲載の様態を確認することにも意義があると考えるからである。

初出掲載、所収歌集刊行年等から推定し、一二枚の歌稿を年代順に列記する。

①～⑭は前掲の〔初出〕図版【①】～【⑭】に対応している。「附」は「大阪毎日新聞」の「日曜附録」、「夕」は夕刊である。（　）内のタイトルは、自筆歌稿になく、紙面掲載時に付されたものである（「土ふみて」のみ拙稿での仮称）。

「湯あかりの後」　（大二年七月二〇日「大阪毎日」）

（「土ふみて」）　（大正二年六～八月　所収歌集より推定）
「秋の薔薇」　（大四年九月二六日「大阪毎日」）
【図版6】「萱の葉」　（⑧大正五年七月一〇日「大阪毎日」
（「短歌」）　⑨大正五年七月三一日「大阪毎日」）
【図版8】（「皐月雨」）　（⑫大正六年五月二一日「大阪毎日」）
【図版9】　（⑬大正七年八月二五日「大阪毎日」
⑭大正七年八月三一日「大阪毎日」）
【図版1】【図版2】「紫影抄」
（④大正一〇年一月二日「大阪毎日」附
②大正一〇年一月七日「大阪毎日」夕
⑤大正一〇年一月一二日「大阪毎日」夕
①大正一〇年一月一六日「大阪毎日」夕
③大正一〇年一月一八日「大阪毎日」夕）
【図版5】　（⑦大正一〇年五月二九日「大阪毎日」夕
⑥大正一〇年七月二四日「大阪毎日」附）
【図版7】　（⑩大正一〇年七月二日「大阪毎日」夕
⑪大正一〇年七月五日「大阪毎日」夕）
【図版3】【図版4】　（⑮大正一〇年一一月「明星」）

原稿用紙はいずれも青罫四〇〇字詰で、「湯あかりの後」「土ふみて」「秋の薔薇」「萱の葉」が「松屋製」、以降が「神樂阪山田製」を用いている。

前稿【図版1】の欄外において、晶子は「一度にお載せ下さい」と朱書していたが、「紫影抄」と題された一五首は、【①】～【⑤】に三首ずつ五回にわたって掲載されたことが確認出来る。また、【④】【⑥】「日曜附錄」は『全集』未所収の初出である。【図版8】掲載の十首は、配列も歌数も全く変更なく掲載され、【⑫】「皐月雨」という題が新たに付されている。旧稿で見た「湯あかりの後」「秋の薔薇」も概ね歌稿の通りに掲載されている。【⑧】「萱の葉」三首は、【図版6】歌稿「萱の葉」一〇首の内の三首で、【⑨】「短歌」に三首、他の三首が他誌・歌集に所収されているが、最後の「萱の葉」を詠み込んだ一首のみ初出・所収歌集が不明のまま残され、歌題と作品との関係が理解し難くなっている。

「紫影抄」以下、大正一〇年に初出の見える歌稿が多く、紙面では分割され、「大阪毎日新聞」夕刊に掲載されている。【①】【②】【③】【⑤】の「紫影抄」三首の直前には、芥川龍之介「奇怪な再会」の連載「八」「三」「九」「六」、【⑦】には、谷崎精二「強者弱者」の「十六」、【⑪】には、宇野浩二「恋愛三昧」の「三の二」が掲載されている。【⑬】【⑭】は、無署名だが、泣菫の「茶話」（「茶人と胃の腑」「蹠と老人の結婚」）が詠草と近い位置に見える。詠草の後は「今日の値段」「最高温度」という物価・気温の記事で、文芸作品は夕刊一面の左下最下段、活字の組み方にはやや余裕があるものの印象としては小さく位置している。【④】「日曜附錄」は、野上弥生子の戯曲「パンドオラの箱―創作―」が紙

面の大半を占め、与謝野寛「太陽禮拜」一二首に続き、「紫影抄」三首が比較的大きく掲載されている。同紙面に西条八十「幻の馬車―童謡―」もあり、紙面全体が文芸で占められている。【⑥】「日曜附録」の活字の大きさは【④】よりやや小さく、文芸以外の記事の左下に二首無題で掲載されている。歌稿と掲載紙面、紙面における詠草の「題」の関係については、検討可能な自筆歌稿の例が限られてはいるが、今後の課題としたい。

以下の画像、【①】～【⑭】はいずれも国立国会図書館のマイクロフィルムからの複写による。実際の紙面より縮小されているため、図版は拡大したが、晶子の作品が紙面に占めた比率、活字の大きさ等を一覧し得ることを考慮した。図版の書誌と掲載歌数を列記しておく。

【図版1】【図版2】「紫影抄」〔初出〕

【①】「大阪毎日」（大正一〇年一月一六日　夕刊）「紫影抄」三首

【②】「大阪毎日」（大正一〇年一月七日　夕刊）「紫影抄」三首

【③】「大阪毎日」（大正一〇年一月一八日　夕刊）「紫影抄」三首

【④】「大阪毎日」（大正一〇年一月二日「附録」）「紫影抄」三首

【⑤】「大阪毎日」（大正一〇年一月一二日　夕刊）「紫影抄」三首

【図版5】〔初出〕

【⑥】「大阪毎日」（大正一〇年七月二四日「附録」）二首

【⑦】「大阪毎日」（大正一〇年五月二九日　夕刊）三首

【図版6】「萱の葉」〔初出〕

【⑧】「大阪毎日」（大正五年七月一〇日）「萱の葉」三首

【⑨】「大阪毎日」（大正五年七月三一日）「短歌」三首

【図版7】〔初出〕

【⑩】「大阪毎日」（大正十年七月二日　夕刊）三首

【⑪】「大阪毎日」（大正十年七月五日　夕刊）三首

【図版8】〔初出〕

【⑫】「大阪毎日」（大正六年五月二一日）「皐月雨」十首

【図版9】〔初出〕

【⑬】「大阪毎日」（大正七年八月二五日　夕刊）三首

【⑭】「大阪毎日」（大正七年八月三一日　夕刊）三首

【図版3】【図版4】〔初出〕

【⑮】「明星（大正一〇年一一月）「草枕」六首（図版省略）

【①】

紫影抄　與謝野晶子

◇

一歩づつ進まず春は翅もて未來へ渡るこころこそすれ

◇

春の雪勸進帳の強力のごときあでやかに歩みくるかな

◇

わたつみが高く上げたる白玉のかひなと見ゆる夕ぐれの月

【②】

紫影抄　與謝野晶子

◇

春寒し霜の穂よりも磯なげになりつゝ雪を四月五日見る

◇

びろうどの春の光のほのさして薔薇の匂へる身のほとりかな

◇

失ひしものことごとく歸りこし歡喜を薔薇の花に覺ゆる

【③】

紫影抄　與謝野晶子

◇

ふるさとの砂山なども思はれてうらなつかしき雪のむら消

◇

美しき雪に根ざしてあるさまず柳ゆづりは白玉椿

◇

わが心絶えずも雨の降るごとし絲の煙のしめやかに立つ

【④】

紫影抄

與謝野晶子

◇

一人居て叩けば夜半の木枯の音に似通ふわがピヤノかな

◇

紅縞の切を被りて愚なる田舍娘の春の歩み來

◇

半いと誇りかにしてその半羞かしげなるあかつきの空

【⑤】

紫影抄　與謝野晶子

◇

薔薇を見ていみじきものが地にひそむ不可思議に泣くはたわれに泣く

◇

霧の降り山彦の聲おもしろき溪の思はる旅にいでまし

◇

彼方の灯ものを說くごとにじみきぬ春の雨夜の長き道かな

【⑥】

與謝野晶子

胡地にして木無き黄土を踏む旅の今うちつけに思はるゝかな

わが手して開くべき戸の多かるに倦みて花咲く園に眠れり

【⑦】

與謝野晶子

わが岩の三尺低きところにて思ひ歎けるわたつみの波

手を組みて空を眺むる白き薔薇痩せたる薔薇もあはれなりけり

何により支へられたるものもなく徒に心くづされて泣く

⑧

萱の葉

與謝野晶子

あぢきなし心に尖のある事を君もおのれも知らぬこの頃
夏の月蒲らにあるが砂濱の貝の葉めきてなつかしきかな
自らを海に沈める果てかとも思ふ五月の長雨のころ

⑨

短歌

與謝野晶子

赤こんぼ蠟燭蜻蛉うへを飛び紫陽花の花清らに光る
黒髪の端も見ざりし旅なごと法師の如き嘘いふものか
大井川あらし山なご舞妓なご夜の皷なご憎き人かく

⑩

與謝野晶子

心より昇る煙もしかめやと思ひ上れるわが煙草かな
天變か何かしらねど愛慾の颱風おこり身の危げれ
花多き少女椿は南國の鳥よりあてに身をもてなしぬ

⑪

與謝野晶子

あて人は漫りに心うごかさず唯涙のみ流るゝと見よ
心をば眞白き龍の如く見て自らおそれ近づかぬ時
陳べて行く心とも見ず戯れに書くともなさぬ文通はせぬ

⑫

皐月雨

與謝野晶子

夏の夜の鈍色の雲おしよけて孔雀あらはる白きひかりに
若き日の夢より出でし君なればおのれと思ふうきもつらきも
君と居てわがありさまを花と云ひ鳥といはせて樂みし時
いくそたびいみじく忍びわが胸へ歸り來りしこの忍術師
七八つの薔薇傾きて竹濡るる戀の雨降る皐月ついたち
疑はば知ると云へかしこのことを一つかなはぬ望みして持つ
足らぬこと少し覺ゆる時に逢ふ夢なぎを見て歎きぬるかな
いつしかと入りにけらしな二筋にひとつびとつの分れたる道
芍藥の芽ごとに白き蝶の居て羽振れば雲の散りこしごとき
自らに代りて君が云ひ給ふ妬みことばかりなつかしきかな

⑬

與謝野晶子

◇君を見ずここにいたると死ぬ際に云ふを恐るる火の地獄より
◇この頃の初秋のかぜ朝夕心にものの足らぬ身を吹く
◇かたはらへ白きものをば積みに來る秋風さしも恐ひけるかな

⑭

與謝野晶子

◇五間ほど後に野馬の息ありてせゝらぎのごと晝の蟲啼く
◇秋風のつめたき沓に踏れたる雜草を見てものを思ひぬ
◇川霧の上に七八つ薄く濃く藍色の山ならぶ朝かな

おわりに

前稿を承け、倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収の与謝野晶子自筆歌稿の内、原稿用紙九枚に記載された短歌作品七四首（内、一首は五句のみ）について、初出・歌集等と比較し、所収状況・異同を確認した。大阪毎日新聞社に勤めていた薄田泣菫に宛てられた原稿と推測されるが、「大阪毎日新聞」の紙面に確認出来るのは今のところ七四首の内、四八首である。**【図版3】【図版4】**一八首は、一二首が「明星」や歌集に所収されているものの、「大阪毎日新聞」に掲載が確認出来ず、六首が『全集』未所収で初出不明である。

本論叢に掲載した旧稿（第四〇号「秋の薔薇」（一〇首）、第四一号「湯あかりの後」（一〇首）、「土ふみて」（一〇首）と合わせ、原稿用紙計一二枚、一〇四首の内、『全集』未所収歌は二一首である。ただし、二一首の内、「大阪毎日新聞」の「日曜附録」に掲載された五首については、初出紙が既に指摘されている（菊池真一「『定本與謝野晶子全集』未収録歌考」（「甲南国文」第四十四号（甲南女子大学国文学会、平成九年三月）一五九～一七二頁））。晶子自筆歌稿において、『全集』未収録歌の内の五首が確認されたことは意義深く、「大阪毎日新聞」掲載歌について、インターネット上（「菊池眞一研究室」（http://www.kikuchi2.com/）〔二〇一三年一一月六日参照〕）においても広く情報を公開されていることにも感謝したい。

結果として、拙稿において「●」で示した一六首が、全集・歌集未所収、初出不明で、未公表作品である可能性が高い。これらの一二枚の自筆歌稿について二〇一三年一月に新聞等で思いがけず大きく報道されたが、「大阪毎日新聞」その他の掲載紙・誌において、初出が確認される可能性に期待し、今後の調査に繋げたい。

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」の内、書簡が添えられず、自筆歌稿のみの状態で保存されている資料は以上である。「薄田泣菫文庫」所収の与謝野寛・晶子に関連する書簡及び書簡に同封された作品、その他の原稿についても継続的に調査・研究を続け公表したいと考えている。